



彼女は工場

生まれたときはみんな喜んだ
 でも町が怪しにつれ
 みんなは彼女を拒絶した

時には怒り 時には悲しみ
 批判の嵐を受けてきた彼女は

今に思う



彼、は私

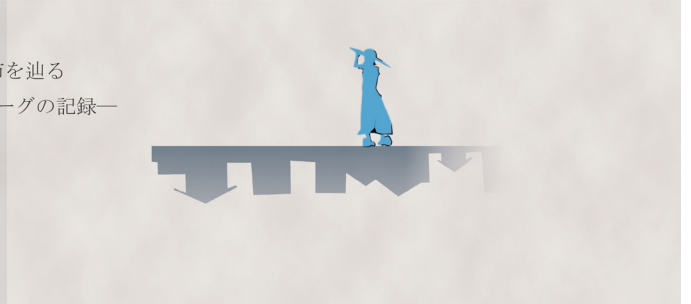
車の彼女の存在を
 青空の下で知る

何が始まったか知りたいたい私は
 何をすればいいか知りたいたい私は

車の彼女と対話を始める



四日市を巡る
 -ダイアローグの記録-



私は四日市に生まれ、四日市で育った。
 四日市は全国で有名である。
 4大公害の一つ、四日市ぜんそくとして、
 どこに行っても出身を言えば「あー、あの噂の〜」
 と言われ、少し複雑な気持ちになってしまう。

そんな四日市を故郷とする身。
 この問題を自分自身の問題ととらえて、
 四日市の過去・現在・これからを
 新たな形で示していこうと思うに至る。

工場の生い立ち

昭和39年、四日市自動車工業株式会社より新築した昭和四日市自動車工場。翌年、100万坪の敷地に昭和石油、コスモ石油などの製油所の建設がはじまる。
 昭和40年、第1コンビナートの操業が始まった。
 直後から、住民から騒音や臭気、振動、悪臭への被害を苦情が相次いで提出された。甲斐重の被害の多くを占めたのは、製油所の排気ガスであった。
 そしてついに昭和40年1月に公害被害者が集まり、第1コンビナート騒音騒害訴訟の幕が上がった。
 昭和42年9月、被害地区の患者が会社を相手として慰謝料請求の訴訟を津地方法院四日市支部に提起し、いよいよ、四日市公害訴訟が始まる。
 その後の争論はこの件について無期でなくなり、昭和44年公害訴訟法により、公害訴訟の審理を迅速化し、賠償を強制する。

昭和46年2月、第1コンビナートが操業終了。私の住む富田地区はこの第1コンビナートの建設の足跡を辿っていた。
 昭和47年、四日市公害訴訟審理事件 判決が下される。患者側が勝訴し被告側は賠償をしないことになった。

公害対策として効果のあったもの

企業側は判決が下るまで何れも対策を講じたわけではない。昭和48年から試行錯誤が始まる。

■60メートル級の煙突から150〜200メートル級の煙突へ

県庁農業技術センターの調査によって、
 コンクリートでは高層煙突化が進む
 四日市以外の工業地帯でも、
 大気汚染の防止策として
 高層煙突化がなされた

■低層黄煙車への切り替え・煙突に集塵装置の設置

その結果には、根本的な解決策として、集塵の新装置化と排煙機集塵装置が
 高層煙突化対策として期待され、四日市の技術開発が注目された。

問題提起

■ 四大公害のうち唯一公害資料館が存在しない

1972年、地元住民9人からなる原告の訴訟は、1967年原告の被害という形で勝訴した。
 そして時は経ち、公害資料館の建設の計画があがった。しかし一番被害を受けた富田地区の連合自治会が、資料館の建設に反対した。
 イメージの悪化を懸念したからだ。
 そのため四日市公害は4大公害のうち唯一、公害資料館が存在しない。

水沢病棟 新築水沢病棟 イタイイタ病棟 四日市ぜんそく

存在せず

■ エネルギー枯渇問題

石油が有機燃料であるという思いがけない、石油はあと30〜40年で枯渇、
 もしくは経済の需要に供給が追いつかなくなると言われている。

そして昨今注目されている新エネルギー「メタンハイドレート」。
 2013年3月愛知県沖で世界で初めてメタンハイドレートからガスを取り出す実験に成功した。
 埋蔵量が豊富であるこのエネルギーの採掘技術新築を支援すれば、
 日本は資源産出国として新たな道が開かれる。

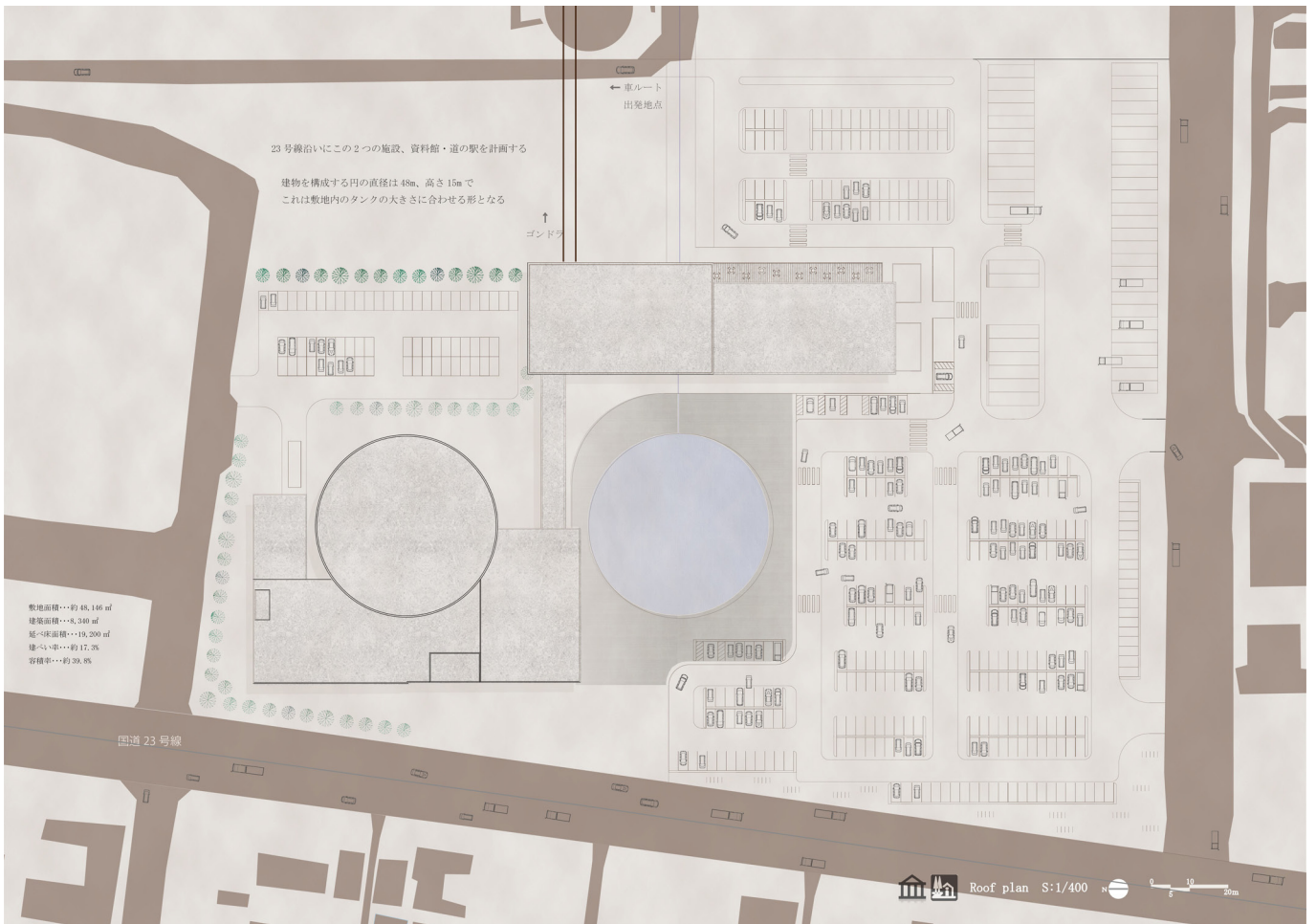
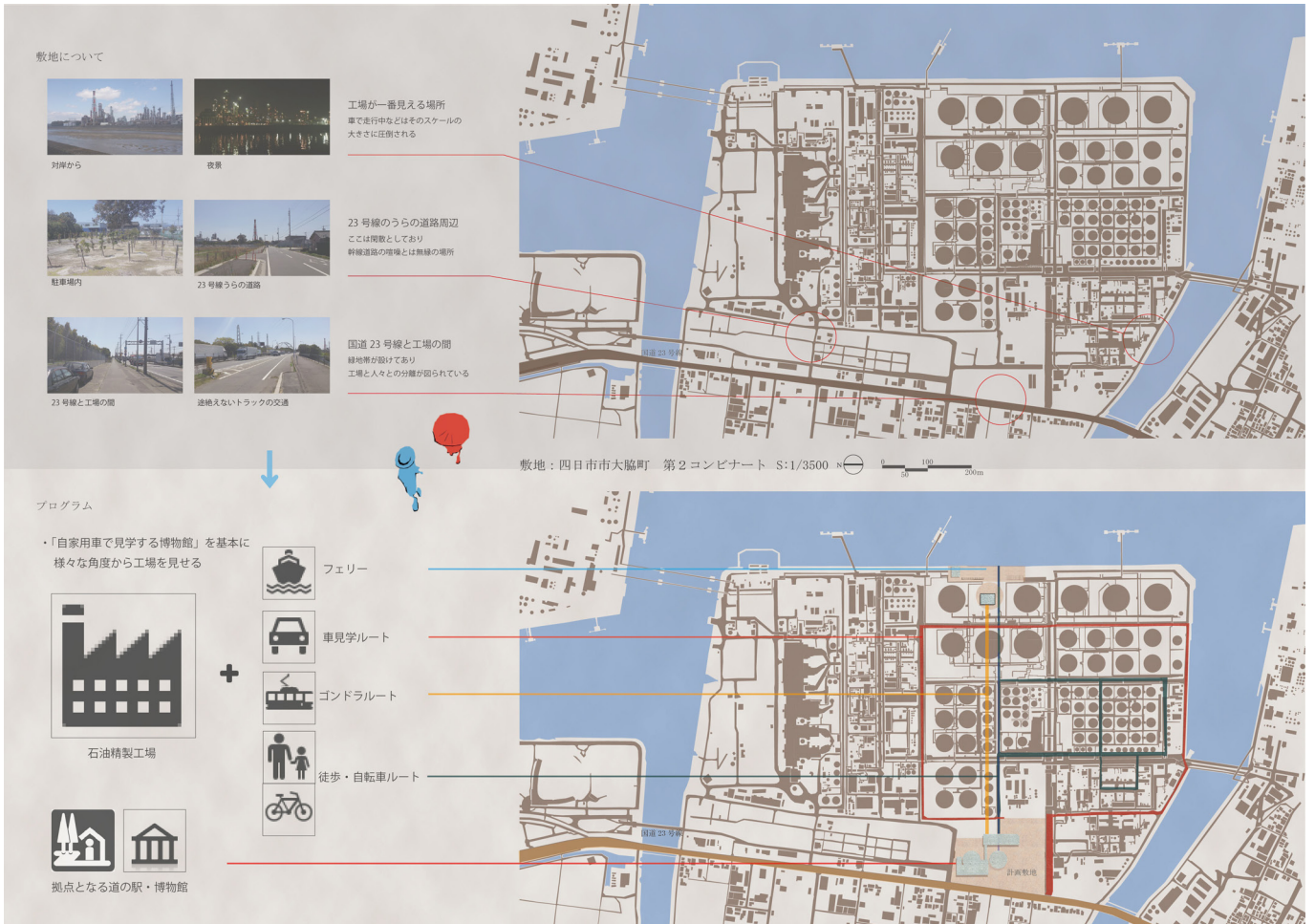
■ 道の駅という存在

四日市の石油コンビナートは第1〜第3まで3箇所あり、それは全て国道23号線の近くで稼働している。
 一方、現在三重県には計15箇所ほどの道の駅がある。しかし、比較的交差点の多いこの23号線沿いには1つも道の駅が存在していない。

↓

■ 石油精製工場を遺産として遺し、四日市の新たな財産へ

市内の博物館に資料館を併設する計画はある。
 しかし、より多くの、より多くの人が興味を持って貰いたい、私は強く思う。
 そこで私はこの圧倒的な存在感を、既存の石油精製工場そのまますべて公開して、
 まな科となる施設に、道の駅・産業技術博物館（公害資料館）を工業地帯内に設け、工場と人をつなぐ拠点をつくる。
 これは主に道利用者の施設として町人に還元し、遺産で誇りや愛は自家消費で見守るべき施設として後世へ伝える。



資料館

四日市ぜんそく

私は小学校の頃、校内で定期的に肝油が販売されていたのをよく覚えていた。大学生になって、友人との自身の地元の話になる。互いの地域の違いに驚く。よくあることだ。

そこで私は肝油の販売は、私の地域独特の文化だと知る。調べてみると、公害対策の一環として、のどを守るため、肝油を飲んでいたらしい。そのを残りだと知った私は、小学生のころ何の知識もなく、おいしい、おいしいと言って肝油を食べていたのを少し恥じた。

四日市ぜんそくについての知識は教科書で学ぶだろう。しかし、このように、ある種の身体験をしていた身からしても、この公害の問題は遠い存在に感じている。他地域の人も同様だ。

そこで私は、公害資料館の必要性を訴えたい。

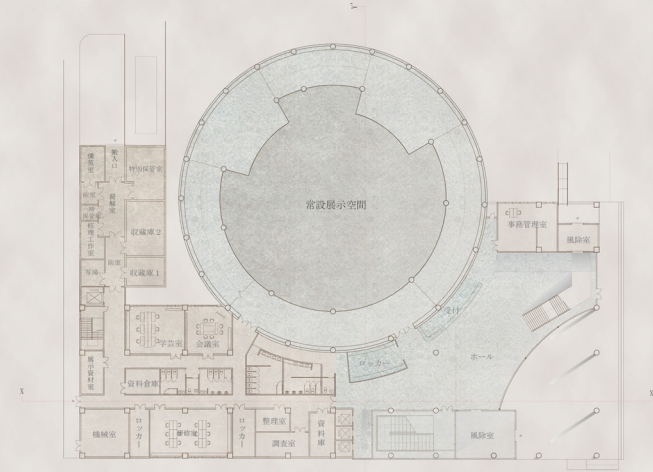
四日市の公害について、工場・市・市民の日本で最早取り組んだ空気汚染対策について、現在の四日市について、少しでも多くの人に深く知ってほしい。公害が発生した、まさにその場所です。

館内について

3Fの企画展示層を基点に螺旋状に下っていく途中2Fの常設展示によることもできる

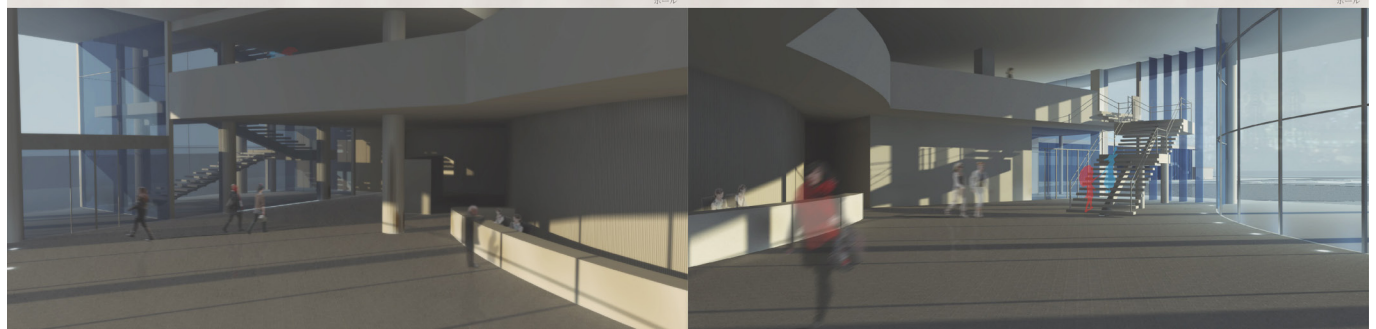
常設展示室では四日市のコンビナートの歴史、公害の軌跡を映像・音声・模型・実際の製品などで展示していく

円柱内は旧四日市港から今に至るまでの四日市の歴史を歩きながら写真とともに迎っていく



常設展示空間

ground plan S:1/250





常設展示空間

2nd floor plan S:1/250



常設展示空間

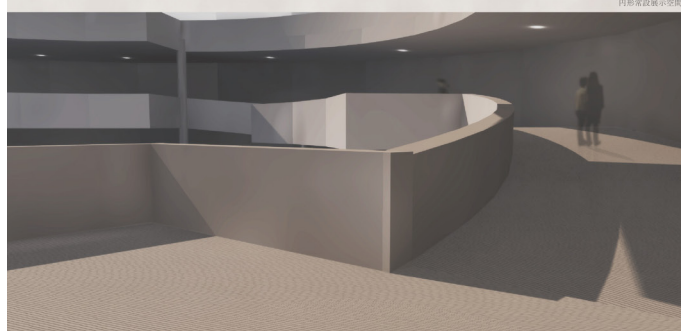
3rd floor plan S:1/250

・螺旋に沿って見ていく四日市の歴史

旧四日市港 旧四日市港海軍燃料所 四日市空襲 四日市ぜんそく 公害患者達の闘争・日記 現在の四日市の取り組み

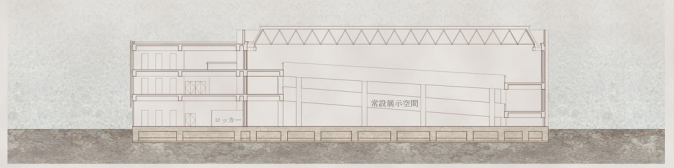
・企画展示は四日市立博物館と連携し巡回展等も催す

企画展示室は3部屋にわかれており、必要に応じて使い分ける





X-X' Section S:1/250



Y-Y' Section S:1/250



west elevation S:1/250



south elevation S:1/250

